

現代日本美術における少女のアブジェクト

—— 澁澤龍彦「少女コレクション序説」に着目して

北海学園大学開発研究所 山田 萌果

日本美術において少女は、清純かつ明るく、愛らしく描かれてきた。このことは、日本美術における少女に注目した美術展『美少女の美術史』展(2014年)において明らかとなった。さらに同展は、イヂチアキコ、唐仁原希らの作品を例に、2000年頃から、従来とは異なる、不気味さや暗さが強調された少女が散見されるようになることと示唆した。しかし同展の性格上、この点については、これ以上踏み込まれなかった。

不気味さや暗さが強調された少女の多くは、少女期を経験した芸術家によって描かれている。本発表はこの点に着目し、2000年以降の不気味さや暗さが強調された少女を、ジュリア・クリステヴァが論じた、アブジェクションの理論に即し、分析する。本発表の意義は、少女美術史的研究に、少女期を経験した者によって描かれた少女を加え、また、美学においてこれまで述べられてこなかった少女のアブジェクトを明らかにする点にある。

そのうえで注目したいのが、澁澤龍彦の「少女コレクション序説」(初出1972年)である。同展担当学芸員も引用したこの論は、1985年に刊行された澁澤のエッセイ本の表題作となり広く知れ渡った。この1980年代、日本では、少女が、近代的なモラトリアムの時間を生きる社会的に宙づりの存在として注目され、「少女論ブーム」が巻き起こっていた。しかし澁澤は、社会を生きる現実の少女たちに着目する「少女論ブーム」の主要な論とは異なり、少女をもの言わぬ「純粹客体」として捉えた。本発表では、澁澤のこの視点を、フェミニズムの観点から批判する。ただし同時に、この論が、少女の清純さや明るさとは異なる、不気味さや恐ろしさに通じる部分に光を当てた点は評価する。この点は、以降の少女表象に影響を与えたのである。

現代の、少女期を経験した芸術家たちは、澁澤が述べたような、死を連想させる少女を描く。彼女らは、少女の恐ろしさや不気味さを前面に押し出し、ときには血や内臓をモチーフにさえする。このような表現には、秩序をかき乱し、境界や場所や規則を尊重しない両義的な事物を指すアブジェクトの特性がある。それは既に、血や内臓を活用するフェミニズム・アートの分析において、美学者キャロリン・コースマイヤーが指摘している。フェミニズム・アーティストたちは、アブジェクトを用い、女性の主体性の主張、従来の芸術制度への異議申し立てを行っている。

本研究が対象とする作品にも、異議申し立てという特性がある。これまで主に男性が少女を描いていたために、現実に少女たちが経験する苦しみや葛藤が隠されていた。少女期を経験した芸術家たちが活躍できるようになり、それらが描かれるようになったのである。彼女らの描く少女は、澁澤の着目したような少女の不気味な魅力を有しつつも、澁澤が述べたような「純粹客体」に留まらない。それらは、秩序に揺さぶりをかけ、さらにわれわれを魅了するという点において、まさしく、アブジェクトなのである。